

## 2018年3月期 決算説明会 質疑応答要旨

日時	2018年5月29日 9:00~9:50
場所	日本証券アナリスト協会 第3セミナールーム
説明者・対応者	代表取締役社長 福山裕二 常務取締役化学品事業部長 秋田大三郎、取締役機能材料事業部長 春日秀文 取締役経営企画部長 岡野克也、取締役人事総務部長 池田宣良
説明資料	2018年3月期 決算説明会 資料

### Q&A

#### ■2019年3月期連結業績見通しについて

Q1. 第2Qは例年同様、営業利益が減少する見通しか。

A1. 第2Qは和歌山工場の定期修理があるため、その影響がある。

Q2. ナフサ等の原料高に対し、製品価格への転嫁は行わないのか。

A2. 当社製品の市況構造は様々であり、価格転嫁できるものについては積極的に行うつもりである。

#### ■各事業について

Q1. トリメチルフェノール（TMP）について、マーケット全体に占める当社のシェアはどのくらいか。

A1. TMPの用途であるビタミンEは世界で約9万tの市場があり、欧州及び中国のメーカーが生産している。具体的なシェアは開示できないが、当社はそれなりのシェアを占めている。

Q2. ビフェノールについて、液晶ポリマー（LCP）、ポリフェニルサルフォン（PPSU）、それぞれ好調の要因は何か。

A2. LCPは車載向けが伸びている。PPSUは高機能なスーパーエンブラ樹脂（SEP）であり、航空機の内装、医療用、哺乳瓶など広範囲に使われている。PEEK、PESなど他のSEPとの競合もあるが、今後も需要は堅調に伸びていくと見ている。

Q3. 光学用特殊ビスフェノールについて、今期の状況はどうか。

A3. 顧客の事業も伸びており、連携を深めつつ取り組んでいく。

Q4. デュアルレンズ化の影響について教えて欲しい。

A4. まず、デュアルレンズ化でカメラの搭載数が倍増している。その上、1カメラあたり5~6枚のレンズが使用されているのだが、その中でのポリカーボネートレンズ比率が増えている。これは高い透明性と屈折率によるもの。この他、複屈折率も注目されるなど求められる機能が複雑化しており、当社もこのトレンドを取り込んでいく。

Q5. 5G時代の到来に伴う新素材の開発に関し、候補材料としてLCPとポリイミド樹脂が挙げられているが、どのようなことか。

A5. 誘電率はフッ素系樹脂になるに従って低くなるが、フッ素系樹脂は成形性に劣るという特徴がある。LCPはフィルムにすると成形性が優れるため、様々な用途での展開が期待される。ポリイミドについても様々な特性があり、それぞれの機能を活かした事業展開を進める。

Q6. 自動車用特殊ビスフェノールについて、ハイビス社の第3プラント新設は中計期間中に間に合うのか。

A6. ハイビス社の自動車用特殊ビスフェノールは好調を維持しているが、JVプラントなどで設備の増強計画などについては、回答を差し控えたい。

Q7. 自動車用特殊ビスフェノールについて、和歌山工場での生産上積みは可能か。

A7. 和歌山工場にはまだ余力があるので、需要増への対応は可能である。

■中期経営計画について

Q1. 中計達成に向けた方策の一つとして、生産能力拡大のための生産委託が挙げられているが、委託先の模索状況はどうか。

A1. 海外も含め検討しており、既にいくつか候補も挙がっている。

Q2. 中計の経営目標と現状とに乖離が見られるが、売上270億円達成に向け、M&Aよりむしろ自社プラントへの投資を優先すべきと考えるが、投資の優先度はどう考えているか。

A2. 投資対象としては今後も成長が見込まれるビスフェノール、光学用特殊ビスフェノール、電子材料などが候補と考えている。但し、新プラントを建設するとなると、当社の場合、通常3000 t 規模のものとなるため、それに見合った規模に至るまでの間は生産委託を活用することも考えている。

■その他

Q1. 事業運営にあたり、大株主である三井物産、三井化学との関係はどうか。

A1. もともと当社は100年の歴史があり、独立運営が基本である。両大株主の資本参加以降、営業面、技術面などにおいて適宜支援頂き、それが当社の強みの一つとなっている。今後、グローバル化がより一層進展していく中で、両社の協力、支援は引き続き重要であると考えている。